

図書室だより

第3号

助けになるのは、言葉の力だ！

前回の図書室だよりで紹介した、直木賞作家の朝井リョウさんから色紙が送られてきました。なぜ、学校に色紙が送られてきたのか？それは、朝井さんのサイン会に行ったときに学校への色紙をお願いしたところ、「出版社に依頼してください。」と言われました。それから、出版社に色紙と手紙を送ったところ、朝井さんの色紙が送られてきたのです。

言葉の力とは何か？朝井さんの色紙の言葉を読んで、言葉について考えました。そんなときに、若松英輔さんという、批評家が書いた『詩を書くってどんなこと？～こころの声を言葉にする』を読んでいて、とてもよい文があったので紹介します。

――言葉は、意思を伝えるために人間が作りだした「道具」なのではないでしょうか。

という読者の質問に対して、若松さんは、次のように答えます。

もし、人間が本当に言葉を、ほかの道具と同じように作り出したのであれば、私たちはそれを使わなくても生きていけるはずです。また、そのはたらきを制御することもできるのではないのでしょうか。文字は、この世に言葉を留めておきたいという願いから生まれたものです。私は、文字すら人間が「造った」ものだとは感じなくなってきました。

言葉の起源という問題は、世界の言語学者を今も悩ませている大問題です。ここで、回答のようなことを述べることはできませんが、ただ、世にある物体のように人間が造ったものではないかもしれない、という考え方をしている人も少なくないことは事実です。

このことを強調したのが、哲学者の池田晶子さん（1960～2007）です。彼女は、古典を語りながら、言葉をめぐって次のように述べています。

何千年移り変わってきた時代を通して、まったく変わることなく残ってきたその言葉は、そのことだけで、人生にとって最も大事なことは決して変わるものではないということを告げている。それらの言葉は宝石のように輝く。言葉は、それ自体が、価値なんだ。だから、言葉を大事に生きることが、人生を大事に生きるということに他ならないんだ。

池田 晶子『14歳の哲学』より



今、みなさんは、国語の授業で古典を学習していると思います。1年生で学習する『竹取物語』、2年生の『平家物語』・『枕草子』、3年生の『奥の細道』など、1000年以上も前の言葉を、私たちは学びます。意味が分からないところもありますが、音読したり、現代語訳したりすると、1000年のときを越えて、その言葉の持つ面白さを感じた人も多いことでしょう。

このように、言葉には価値があります。その価値ある言葉を粗末に扱ってはいけないのです。言葉を大事にして使い、仲間と会話し、伝え、わかり合うことが、人生を大事に生きることにつながるからです。

直木賞作家朝井リョウさんが送ってくれた色紙です。図書室にも飾っているので、ぜひ、本物を見てみてください。また、朝井さんの本も一緒に手にとって、「言葉の選択肢を沢山受けとって」欲しいと思います。あなたを助ける「言葉の力」を沢山獲得してください。色紙の周りに図書室にある朝井さんの本も紹介するので、ぜひ、興味があったら読んでみてください！！

流山市立南流山中学校の皆さんへ
 真っ黒、でも真っ白でもない、この世界を
 あなたなりにどう捉えて生きていくのか。
 そんなときに助けになるのは言葉の力だと
 実感しています。本から言葉の選択肢を沢山
 受けとって、あなたが見える世界に当てはめることで、
 呼吸が出来る日がきっとあります。朝井リョウ

